室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

椴法華(とどほっけ)における言語と風習：失われゆく伝統

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): Todohokke dialect, devoising, vocalization, standardization, folklore 作成者: 島田, 武, 橋本, 邦彦, 寺田, 昭夫, 塩谷, 亨 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2864

室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

椴法華(とどほっけ)における言語と風習 : 失われゆく伝統

その他（別言語等）のタイトル	Endangered Dialect and Tradition in Todohokke
著者	島田　武，橋本　邦彦，寺田　昭夫，塩谷　亨
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	51
ページ	173-182
発行年	2001-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/2864

室工大紀要第51号(2001)173～182

椴法華(とどほっけ)における言語と風習－失われゆく伝統

島田　武[*1]，橋本　邦彦[*1]，寺田　昭夫[*1]，塩谷　亨[*1]

Endangered Dialect and Tradition in Todohokke

Takashi SHIMADA, Kunihiko HASHIMOTO,
Akio TERADA and Toru SHIONOYA

(原稿受付日　平成13年5月7日　　論文受理日　平成13年8月31日)

Abstract

This article conducts an urgent survey on the Todohokke Dialect, which is considered one of the endangered dialects in Japan. The present study describes phonetic properties and gives a presentation of vocabulary and folkloristic customs in Todohokke to preserve its linguistic features and other precious heritage and tradition.

keywords: Todohokke dialect , devoising, vocalization, standardization , folklore

1　序論

今世紀中に世界の6000言語のうち半分が消滅し、さらに次の世紀には残る言語の多くも消滅に向かい始めるという予測がなされている今日、世界中で危機に瀕した言語の緊急調査記録を行うプロジェクトが進められている。急速な消滅の危機というのは、言語だけではなく、その言語の下位分類である方言にもあてはまる。日本語の諸方言についても、マスメディアの発達等による急速な共通語化の影響を受け、それぞれの地方特有の文化を担ってきた諸方言が急速に消滅しつつある。特に過疎化が進む地域では、消滅の進度はさらに速いものであると予測される。方言も地方文化の固有の遺産であり、その意味では、方言を失うことは、伝統芸能や伝統工芸、或いは、文化財を失うのにも等しいものである。しかしながら、そのような認識は一般にはまだまだ浸透していないのが現状である。

今回の調査地である椴法華村も、過疎化の進行に加えて、急速な共通語化により、話者人口の高齢化が進んでいる。この事態を放置しておくと、今世紀早々には、椴法華方言は消滅してしまうのではないかという危惧がある。そこで、平成12年7月に、この付近の方言を緊急に調査・記録するために研究チームを発足させた。本稿は、その初年度の研究成果に基づ

*1　共通講座

くものである。

平成 12 年 9 月と 11 月の 2 回にわたり、椴法華村に赴き、聞き取り調査、及び資料収集をおこなった。このうち第 2 回目の調査は、室蘭工業大学 CRD センタープレ共同研究「道南渡島東岸部方言の緊急調査」の助成によるものである。椴法華方言についての先行する言語調査としては、石垣[(1)(2)]のものがあるが、いずれも 20 年以上前のものである。本研究では、その後 20 年を経た椴法華方言がどのように話されているのかできる限り精密な記述を行い、更に、言語学的及び音声学的ないろいろな角度からこの地方の方言の分析を進めていくことを目的とする。

2　椴法華方言の音声

2.1　音声的特徴

この節では椴法華方言の音声的特徴を記述する。調査に協力して下さったのは椴法華村の玉村栄吾氏、大正15年生まれ、75歳、男性。ご両親が福井から移住されてのち、椴法華村で生まれ、言語形成期を過ごした。本調査では第一回目ということもあり、音声の自然さを重視して自然談話を SONY 社製 DAT レコーダー TCD-D100 と同社製エレクトレットコンデンサマイクロフォン ECM-MS907 を用いてサンプリング周波数 44.1kHz で録音した。

椴法華方言は東部方言の中の北海道方言に属している[(3)]。北海道の中でも札幌や旭川を中心とする都市部の方言とは音声的特徴が異なっている。

まず母音に関する特徴としては中舌母音の[i]あるいは[ü]の存在があげられる。「海」という単語には2種類の母音があり、どちらも中舌母音で[üm̈ i]と発音される。中舌の[i]が現れるのに付随して共通語の[ɕi][ʑi]が[si][zi]として発音される傾向にある。また[e]の開口度が小さく、時に[i]もしくは[i]のようになる。今後の課題としてはこれら三つの母音の分布と対立の状況を精密に調べるということがあり、精密な音響分析を予定している。

この二つの母音に関して、いわゆる母音の無声化が観察された。例として「そして」[sosi̥te]、「二人」[ɸü̥itaɾi]などがある。無声化の生ずる環境は、主に無声子音間の狭母音であり、東京方言と同じであると思われる。しかし北海道方言は無声化が目立たない方言であるという研究[(3)]もあるため、今後の継続的調査が必要である。

次に子音に関しては、いわゆる「ヒ」と「シ」との混同として扱われる現象が観察される。[ç]と[ɕ]、または[s]が交替する例として「火」が[ɕi]、「人」が[ɕi̥to]と発音されているものがある。ただし今回の調査では「シ」が「ヒ」として発音されているものは見あたらなかった。一つの理由として[s]の摩擦が強いことがあげられるかもしれない。

また北海道周辺部方言を特徴づける現象として母音間での無声破裂音の有声化が観察される。特に歯茎音の[t]と軟口蓋音の[k]の例が数多く観察された。前者には「竹」が[takẹ]として発音される例があり、後者には「言葉」が[koṭoba]のように発音される例が観察される。通例母音間で有声化された子音が有声音で置き換わると記述される事が多いが、実際の音声を聴いてみると、有声化された子音と本来有声の子音は異なっている。これは有声性すなわち声帯振動の有無の関する差異はなくなっていたとしても tense と lax の違いはまだしっかりと保持されているということである[(4)]。このことは次に述べる入りわたりの鼻音との関係があり、詳細な研究が必要であると考えられる。

母音間での有声化と並んで椴法華方言を特徴づけるものに音声特徴に入りわたり鼻音の存在がある。入りわたり鼻音とは有声破裂音の破裂に先だって鼻音が聞こえることをいう。[b][d][g]がそれぞれ[ᵐb][ⁿd][ᵑg]のように発音されることをいう。頻出するのは相づちを打つときに「んだ」のように発話をするときである。決して「ん」の部分を長く発話をすることなく[ⁿda]のように軽く鼻音を破裂音に添えるようにして発音される。ただし語彙によってはそれほど顕著で無い、もしくは観察されない場合も多い。これが協力者固有の特徴なのか、椴法華方言全般に言えることなのか明確な答がまだ出ていない。詳しくは今後の調査を待たねばならない。

そのほか鼻音に関しては長音と交替している例がある。「蒙古」を「モンコ」[moŋko]、「平等」を「ビョーンド」[bjõⁿdo]と発音することがある。

以上の音声特徴を見てくると椴法華方言には北海道周辺部方言の特徴がよく保存されていることがわかる。これらは札幌等の都市部方言ではすでに失われてしまった特徴であり、若年層の音声特徴が都市部方言化つまり共通語化している現在、本稿およびその基になった音声データは非常に貴重であると言える。

目を北海道の外に向けると椴法華方言の音声特徴は北奥羽地方と共通性があることがわかる[(3)]。これは北海道に移住した先達の多くが奥羽から来たということによる。したがってこれからの課題として椴法華方言と北奥羽方言との対照研究が課題となる。

2.2　談話テキスト

以下で、第１回調査で記録された談話テキストを掲載する。内容は、主に、子供の頃の遊びに関するもので、約７０分のＣＤ録音の前半部分をカナ表記し、標準口語訳を付した。橋本が最初に音声資料を基にカナ起しし訳したものを、自身道南方言の話し手でもある寺田（七飯町出身）がチェックし修正した。カナ表記はあくまで聴覚印象によったので、付録(Appendix)に挙げたＩＰＡ音声記号による厳密な音声表示との間に異同が見出せる。

椴法華村第１回方言調査談話記録：カタカナ表記と標準口語訳[1)]

01タケデ　アソゴノナ　タゲカッ　ヒトノエノ
それで　あそこのね　竹かっ　他人の家の
マエデノ　タケカッパラッテクルンダカラノ
前でね　竹を盗んでくるんですからね
02デ　ツカマエタラ　ホレ　スグワガル
それで捕まえたら　ほら　すぐにわかる
ベサ
でしょう
03ソイデモ　ホラ　カオミバ　チンサナワラス
それでも　ほら　顔を見れば　小さな子供なん
ンドダバ　ソーインタモンデ　ホレ　ホカノ
だから　そういうことだから　ほら　他の
モントルナッテ
ものは取るんじゃないよって
04ソノヨーニシテネ　アノ　イロイロト
そんなふうにしてね　あの　色々と
ヤッパリノ　シドーシテクレタモンダヨ
やっぱりね　指導してくれたもんですよ
05ウミサハイルドギモ　ソノトーリ　ネ　イチニ
海に入るときにも　その通りで　ね　一、二
サンデモッテ　ノ　ウミノカミサマタッテケレ
三でもって　ね　海の神様、立ってください
ッテ　ノ
って　ね

06ソシテ　ホレ　オシッコスルノニ　ウミサム
そして　ほら　おしっこをするのに　海に向
ガワネデ　オガサムガッテ　ションベンシタモ
かないで　陸に向かって　小便をしたもので
ンダ
す
07ウミノカミサマタッテケレッテ
海の神様、立ってくださいって
08マズィセ　ダカラ　イマユー
それで　だから　今言われているような
ワレワレノイマノコトバデユエバ　ソノ　モノ
私たちの今の言葉で言えば　その　もの
ダイジニスル　ノ　シゼンヲ　イゼン
大事にする　ね　自然を　依然として
ソシテ　ダイジニシテキタ　ソノコトバモ
そして　大事にしてきた　その言葉も
ダンダン　ナグナッテシマッタワゲテコトサ
だんだん　なくなってしまったという訳ですよ
09ウウウウーン　ウミノカミサマタッテケレッテ
ううううーん　海の神様、立ってくださいって
10タッテケレッテ　マー　ウミサハイッテデ
立ってくださいって　まあ　海に入ってからで
モ　ワレワレションベンスルカラ　オシッコ
も　私たちは小便をするから　おしっこを
スルカラ　ネ　マ　ワレワレノコトバデユエバ
するから　ね　ま　私たちの言葉で言えば
マ　ユルシテケレッテユーイミナンダベシ
ま　許してくださいっていう意味なんでしょう
ノ
ね
11マー　ソシテ　ナゲバネ　ヨグネ　アノ
まあ　それから　泣けばね　よくね　あの
ナゲバヤマカラモンコクルドッテ
泣けば山からモンコが来るよって
12モンコクルドッテ　ヨグイワレダモンダ
モンコが来るといって　よく言われたものです
13オバゲノモンコダモノヤラ　オレダカイセツ
お化けのモンコなものなのか　私が解説を
シテミタバアイニ　アレノ　アレ　アレ
してみた場合に　あれね　あれ　あれ
ナンデ　ユッテタダカ
どうして（モンコと）言ってたんだか
アノジダイニモーコガセメテキテノ
あの時代に蒙古が攻めてきてね
14モンコトモーコヲ　イッショニシテイル　シテ
モンコと蒙古とを　一緒にしている　して
ルモノヤラネ
いるものなのかね
15モーホトッンド　モーソーユーコトバモナグ
もうほとんど　もうそういう言葉もなく
ナッタシネ
なったしね
16ンダ　ナゲバヤマカラモーコクルゾッテ
そうだ　泣けば山から蒙古が来るぞって
17オー　ズイブンハヤイネ

おう　ずいぶん早いね
18ヨースミテバ　ヨニンモクレバ　オメエ
様子を見るたって　四人もくれば　あなた
タガシノダイクサ
たがし（固有名詞）の大工さんでも
ユルグネィベヤ
大変だよ
19ゴクローサン　ゴクローサン
ごくろうさん　ごくろうさん
20ソンダ　ソンダ　ウミサムガワネデネ
そうだ　そうだ　海に向かわないでね
21ムガウドキワ　ユードキワ　アノ
（海に）向かうときには　言うときは　あの
シゴニンシテ　アノアイダ　シゴニンシテ　ノ
四五人して　あのあれだ　四五人して　ね
ウーミノカミサマタッテケレッテ　ノ
海の神様、立ってくださいって　ね
22ソイデ　ミンナコッチャムイデ　コンドウミサ
それで　みんなこっちを向いて　今度海に入る
ハイルニ　ミンナションベンスルワケ　ヤヤ
ときに　みんな小便をするわけです　やや
コッチャムイデ
こっちを向いて
23ソイデ　ミンナイッセイニハイル　ハイル
それで　みんなで一斉に入るんだ　入るんだ
24ノ　チャッコイドキニ　ヒトリヒトリッテ
ね　小さいときに　一人一人で
ハインネガッタナー
入らなかったなあ
25ホトッンド　ガキドモ　フタリサンニンシテ
ほとんど　子供たちは　二人三人して
ゴニンクライシテ　ホトッンド　ウミサハイッ
五人くらいして　ほとんど　海に入っ
タモンダ
たもんです
26ヒトリウミッテワネ　オイダチワ
一人で海に入るというのはね　私たちは
ヨゲーネガッタナー
あまりしなかったなあ
27ウミサハイッテ　オレ　イマユー
海に入って　私が　今言っているように
オヨグノッテナ
泳ぐんですね
28オヨグモナンダケド　ガンゼデモ
泳ぐのもなんだけれど　バフンウニでも
ナンデモノ　ニメーターサンメーター
なんでもね　二メートル、三メートルも
イゲバ　アルンダー
もぐれば　あるんですよ
29ンデホレ　ミンナーシテ　ミンナーシテ
それでほら　みんなで　みんなで
ホレ　キョーリョクシアッテ　デ　オガマワリ
ほら　協力し合って　で　陸担当とい
ッテ　アノーホレ　マーコーユエバ　マ　ネ
って　あのほら　まあこんな風には　ま　ね
ユエナイケド　イマデユエバ　ホレ
言えないんだけれど　今言うとすれば　ほら
コレナンテンダ　ホレ　アノー　カーサン
これを何と言うんだ　ほら　あのー　母さん
ショッコノコド　ナンチュンダ　アレバ
ショッコのことを　なんて言うんだ　あれは
ショニマシダ
小児麻痺だ
30ショニマシノシトダチワ　ホレ　オヨゲネー
小児麻痺の人たちは　ほら　泳げない
ワケダベシ
わけでしょう
31ソーユーノワ　オガマワリッテノ
そういう人たちは　陸担当って言ってね
32アノー　オガノホー　シータクノニ　ホレ
あのー　陸の方で　火をたくのに　ほら
シータクノニ　ノ　ミセノノナノカゴダトカ
火をたくのに　ね　店のウニを入れる籠だとか
ソーユーモノヲ　コーモッテキテ　ソイデ
そんなものを　こう持って来て　そして
シータクスタンバイスルワケヨー
火をたくスタンバイをするわけですよ
33ワダインダチニワ　ワラサンド
私たちみたいな　（わんぱくな）子供たちは
オキサデテ　マー　ナマラニズップンモハイ
沖に出て　まあ　いいだけ二十分も入ってい
レバネ　コー　タルサシトツ　ガンゼトルンダ
ればね　こう　樽に一つ　ウニを取るんだ
34ガンゼ　トルワケダベシー　ノ
ウニを　取るわけなんですよ　ね
35ソイデ　コンド　マズトッテモッテクルデショ
そして　今度　まず取って持ってくるでしょ
ホレ　マルイシノオヤジトガ
ほら　まるいし（固有名詞）のおやじとか
ショッコトカ　ダトカ　オヨゲネーカ
小児麻痺の子供とか　だとかは　泳げないか
ラ　オガマワリシテ　シータイテ　タイテ
ら　陸担当になって　火をたいて　たいて
マッテルベサ

待っているんですよ
36シテ　ワケルドギモ　コレデ　オッキーカ
そして　分けるときにも　これで　大きい方か
ラ　オカマワリモシトッツ　オヨデ　オキサイ
ら　陸担当の者にも一つ　泳いで　沖に行
ッテキタシトニモシトッツ　ダカラ　ホンット
って来た人にも一つ　だから　本当
ニ　ソノ　イジメモネカッタシノ　ソデ
に　その　いじめもなかったしね　それで
アイダベサ
あれでしょ
37ホントーニ　マ　ズルイワラサンドダバ　アス
本当に　ま　わんぱくな子供たちが　集
バッタ　ダカラ　ホントニイイセカイダッタ
まった　だから　本当にいい世界だった
38イマ　シンブンミレバネ
今　新聞を見ればね
39イヤ　コノヘワ　ホトンド　ガンゼデネーガ
いや　この辺では　ほとんど　ガンゼでないか
ミナミカヤベデモ
南茅部でも
40エサンノホーデモ　ホトンドガンゼダヨ
恵山の方でも　ほとんどガンゼだよ
41ガンゼダノ　ノーナッテンダヨ　ノ
ガンゼだね　ノナって言うんだよ　ね
42ノナテノワ　アレ　アノ　ガンゼノコト
ノナって言うのは　あれ　あの　ガンゼのこと
バフンチューテナ
バフンウニと言ってね
43ソイカラ　ノナノコトヲ　オイチョット　ノナ
それから　ノナのことを　おいちょっと　ノナ
ノコトヲ　ナンチューユ
のことを　なんて言うんだ
44ムラサキウニ　ノナ　ウーン　シラ
ムラサキウニ　ノナ　うーん（奥さんに）知ら
セテアッタンダプ
せてあったんだよ
45デ　オガマワリモ　オキサユグシトモ　オナジ
で　陸担当の者も　沖へ行く人も　同じ
サ
さ
46キョーンドニワゲデ　ノ　ビョードニ
共同に（みんなで）分けて　ね　平等に
オッキホガラ　ビョーンドニ
大きい方から　平等に
47ソイカラ　ヤマサイッテ　スギノキサノボルン
それから　山へ行って　杉の木に登るん
ダ　スギノキサ　ノ
だ　杉の木に　ね
48ソイデ　ブンドノアカダマーハ　オガッテン
それで　山ぶどうの赤い実が　なっているん
ダヨ　ノ　ブンドノアカダマッテ　アンタガタ
だよ　ね　山ぶどうの赤い実って　あなた方に
ユッテモ　ワカネケド　ウンダヤ
言っても　わからないだろうけれど　熟れたや
ツ　ウンダヤツ
つ　熟れたやつ
49スギノテッペンサ　ノ　ソシタラ　コー
杉の木のてっぺんに　ね　そうしたら　こうい
シトダチ　ホレ　ワカルベシ　ノボレネー
う人たちは　ほら　わかるでしょ　登れない
ベシ
でしょ
50ソイッカラ　ズレーワラサンド　ホラ
それから　元気のいい子供たちが　ほら
オドシテヨゴスベサ
落としてよこすでしょ
51ソヤ　テキラーカ　コンドシタニイデ　ホレ
それで　相手方が　今度は下にいて　ほら
シロイカダサ　デソノ　ワゲルドキニモ
拾う役目だよ　それでその　分けるときにも
ノ　ツライイノガラ　コヤッテ
ね　見てくれのいいものから　こうやって
ミンナ　ダカラ　ホンットニノ　オラダノ
みんなで　だから　本当にね　私たちには
イジメーテユコトバモ　シラナガッターシサ
いじめっていう言葉も　知らなかったしさ
52マズィセ　デ　ソノシトタヂ　コンド　シャッ
それで　で　その人たちが　今度　社会に
カイニデダドキ　ノ　ソンカイギインシタリ
出たときに　ね　村会議員になったり
ナンセ　エラクナッテモ　ネエ　マズィサ
なんせ　えらくなっても　ねえ　まずね
ヨグイッタモンダ　ヤ　ツギサンダバ
よく言ったものです　やあ　つぎさん（固有名詞）
ズルイワラサンドデアッタケド　マ　ズィンブ
わんぱくな子供だったけれど　ま　ずいぶ
ン　オラダヂ　メンドミタモンダデ
ん　私達のことを　面倒みてくれたもんだって
オレダヂモ　ナンモソノ　メンドーミルトカ
私たちも　何もその　（意識的に）面倒を見
ソーユーンデネーノセ
てあげようとか　そういうんじゃないんですよ

53シゼンダノセ　ノ　ワレワレノバーイワ　マン
自然なんだよ　ね　私たちの場合は　まず
ズ　ユワセバサ
言わせてみればね
54ウンダ　リグツダベサ　スギノキテーノワ
そうだ　当たり前でしょう　杉の木というのは
ノ　ザツノキヨリモ　コー　タカクナッテンダ
ね　雑木よりも　こう　高くなってるんで
ヨ　ノ
すよ　ね
55ソー　ホレ　ウエサ　ホレ　ツラ
それで　ほら　上に　ほら（ぶどうの）つる
ノボッテ　アレスレバ
が（成長して）上に育っていく　あれをすれば
オシサマノアタリガイイカラ　ハヤグ　ホレ
日当たりがいいから　早くに　ほら
アノ　ウムワゲヤンセ　ノ
あの　熟すわけなんですよ　ね
56ソレヲ　イヂイヂ　ホレ　アレシテミテ
それを　いちいち　ほら　あれをしてみて
コンド　ウエガラオドス　ホーセバ　シタニ
今度　上から落とす　そうすれば　下に
イデ　ホレ　ノ　ブンドトリニイッテ
いて　ほら　ね　山ぶどうを採りにいって
ホレ　シロイカタハー　ワラサンドイデ　ソー
ほら　拾う係の方は　子供たちがいて　そう
ユーシトタチ　チャント　ダンタイアルモン
いう人たちは　ちゃんと　グループがあるもん
ダンダ
なんだ
57マーズィ　オラノオボエデルハンイデワ　アノ
まず　私の覚えている範囲では　あの
アイダ　オレチャッコイドギ　ヨーグ　マダ
あれだ　私が小さい頃　よく　また
オラノオドートイモートダヂモ　ホラ　ナゲバ
私の弟や妹たちも　ほら　泣けば
ヤマガラモーコクルゾテ
山から蒙古が来るぞって
58マー　ソレカ　ワダチャッコイドギニ　ウミサ
まあ　それか　私が小さいときに　海に
ハイルドギ　ウミノカミサマタッテケレッテ
入るときに　海の神様、立ってくださいって
ソーユー　アレ　ネーナア
そういう　あれは　ないですねえ
59タッテケレッテ　ウンダ　ソレ　ホレ
立ってくださいって　そうだ　それ　ほら
イマユー　ノ　オドナデカンガエラレネー
今言う　ね　大人では考えられないねえ
ヤッパリ　ソーユーアレガアルンダベシネ
やっぱり　そういうあれがあるんでしょうね
60ネ　マー　シツレーニアダルトガ　ノ　シタ
ね　まあ　失礼にあたるとか　ね　だ
カラ　カミサマガネ　ションベンカケルテバー
から　神様にね　小便をかけるって言えば
テノ　ソーユー　マ　イマノコドバデユエバ
ね　そういう　ま　今の言葉でいうなら
コレ　ナンチュンダカ　ノ
これを　なんていうのか　ね
61デ　シトリシトリワ　ワタシモヨ　ヤッパリ
で　ひとりひとりでは　私もね　やっぱり
アノ　ヨゲイウミサハイッタタメシネーノ
あの　あんまり海に入ったためしはないですね
62タイゲイモ　フタリサンニンゴニンシテネ
たいがい　二人、三人、五人でね
63マ　マンズィ　ナーニヤルニモ　ミンナダナ
ま　まず　何をするにも　みんなだね
64ワリィゴトスルニモ　ヤッパ　ミンナサ
悪いことをするのも　やっぱり　みんなでさ

談話テキストに登場する注意すべき方言語彙を、語彙、テキスト番号、品詞、意味の順で列記する。

方言語彙集：
アカダマ（４８）［名詞］赤い実
アスバル（３７）［動詞］集まる
ウム（４８，５５）［動詞］熟する
オイダチ（２６）［代名詞］わたしたち
オガル（４８）［動詞］育つ、成長する
オラダノ、オラダチ（５１，５２）［代名詞］わたしたち
ガキドモ（２５）［名詞］子供たち
ガンゼ（２８，３３，３４，３９，４０，４１，４２）
［名詞］バフンウニ
ケレ（０５，０７，０９，１０，５８，５９）［助動詞］
～してください
ショッコ（２９）［名詞］小児麻痺
チャッコイ（２４）［形容詞］小さい
ツラ（５１，５５）［名詞］顔、見てくれ、ぶどうのつる
ナマラ（３３）［副詞］いいだけ、～くらい
ノナ（３２，４１，４２，４３，４４）［名詞］

ムラサキウニ
ブンド（４８，５２）［名詞］山ぶどう
ベサ、ベシ（０２，１０，３０，３４，３５，３６，４９，５０，５４）［助詞］～でしょう
マズィセ、マズィサ（０８，５２）［談話標識］まず、それで
ユルグナイ（１８）［形容詞］大変な
ヨゲー（２６，６１）［副詞］（「ネー」などの否定辞とともに）あまり～ない
リグツ（５４）［名詞］当たり前
ワラサンド（０３，３３，３７，５０，５２，５６）［名詞］子供たち[2)]
ｃｆ．ワラス：子供
ワインダチ（３３）［代名詞］わたしたち

3　子供の生活誌

第２節の談話には、昭和初期の村の子供たちの遊びの様子が描き出されている。それは、主に、三つのトピックに分けることができる。

3.1　海で用を足す時の風習（０５～１０、５８～６２）

子供たちが海で小便をする際に「ウミノカミサマタッテケレ（海の神様、立ってください）」と言う習慣があったことが、報告されている。なぜ、「タッテケレ」なのか、玉村氏は「ユルシテケレ（ゆるしてください）」（１０）という意味ではないかと解説している。海の神様に起立を求めるのは、小便をかけると「シツレーニアタル（失礼にあたる）」（６０）から、立ってもらうことでそれが回避できるという考えからなのだろうか。海の神様は、常態では、座していると信じられているのだろうか。放尿の方向が海（沖）ではなく陸地に向かってであるのも、海の神様に対する儀礼の現われであるように思われる。

椴法華村の基幹産業が漁業であり、津軽海峡を「塩の川」と呼ぶほどに海からの恩恵を受けている人々の穢れを避けようとする心情が、子供たちの習俗の形になっているのかもしれない。同時に、「ヒトリウミ（一人で海に入る）」（２６）ことをせず、「フタリサンニンシテ、ゴニンクライシテ（二人三人で五人くらいで）」（２５）入るところに、海に対する恐れの念があるのだろう（別の談話では、「アカシャク（船に入った水を掻き出すために用いるひしゃく）」をめぐる怪異談が出てくる）。いずれにしても、似たような習俗が、渡島海岸部の他の地域や津軽・下北周辺にあるのか調査する必要がある。

3.2　脅し文句としての「モンコ」のこと（１１～１６、５７）

だだをこねて泣いたときに大人の口から出る決まり文句に「ナケバヤマカラモンコクルゾ（泣けば山からモンコが来るぞ）」というものがある。これには、言うことを聞かずに泣きわめく子供を黙らせる脅しの機能があったようだ。玉村氏は、お化けのような何か恐ろしい存在として子供時代に「モンコ」を理解していたが、後年、それが実は、「モーコ（蒙古、モンゴル）」のことではないかと解釈し直している。興味深いことに、私の父親（橋本忠司、７６歳）も幼い頃、祖母から「そんな風にいつまでも泣いていると、モーコが来て連れて行かれてしまうよ」と諭されたと回想している。父親も、後年、「モーコ」が蒙古であることに思い到ったそうである。父親は、大正１４年生まれで、富山県で育った。一方、玉村氏は大正１５年生まれで、親の代に福井県から移住してきた。村の人口の３割は、ルーツを福井県にもち、石川県、新潟県がそれぞれ１割を占めている。

蒙古の襲来は、１２７４年の文永の役と１２８１年の弘安の役の二度にわたって起こった。博多湾を襲ったフビライの軍隊は、当時の日本人に強烈な印象を与えたことは想像に難くない。７００年近くの時代を超えて民衆の間で伝承されていき、その正体の特定も忘れ去られたまま、異形の恐怖の記号に変質して、手に負えない子供を脅す呪文になったと考えられる。因みに、私の大学院時代（昭和５３～５６年）、ハンガリー出身の留学生クタッシュ氏から、幼い頃祖母に「早く泣きやまないと、モンゴルに連れていかれるよ」と言われたという思いで話を聞いたことがある。モンゴル軍がハンガリーに侵攻してきたのも１３世紀である。

ただ、疑問が残るのは、なぜモンコは海からではなく、山から来るのだろうか（１１）。周囲三方を山に囲まれて、交通を専ら海に頼らなければならなかった村人にとって、海は開けた所、山は閉じた不気味な所との意識があったのだろうか。[3)]

3.3　遊びのルール（２７～５６、６３，６４）

遊びには、海遊びと山遊びがある。どちらも集団での行動で、役割分担と分け前の公平さという

特徴が見られる。特に注目したいのは、「ショッコ（小児麻痺）」（２９）に代表される身体の不自由な子供の扱いである。この子供たちを「ズルイワラサンド（わんぱくな子供たち）」のグループに属する子供たちが排除したり差別したりするのではなく、相補い合う関係で、遊びが成立しているのである。

分配の仕方も、ウニであれば大きいものから、ぶどうであれば「ツラノイイ」ものから、一つずつ公平に行われる（３６，５１）。しかも、弱者の面倒を見てあげようと意識的になされるのではなく、自然になされる行動なのである（５２，５３）。これは村落共同体の相互互助が、子供の行動様式に反映しているせいなのかもしれない。以上のような役割分担をまとめると表１のようになる。

表１　遊びにおける役割分担

	海遊び	山あそび
ズルイワラサンド	沖に泳いでいってウニを採る	木に登りぶどうを採る
ショッコ	陸で火をたいて準をする	木の下で落としたぶどうを集める

この談話テキストで語られた子供の生活誌の三つの事柄は、現在では完全に失われている。同席した三十代の教育委員の男性も、初めて聞く話ばかりで、自分たちの子供時代にはない習慣だと述べていた。したがって、戦前の村の子供の日常の姿を伝える貴重な証言であると同時に、民俗学上の一級の資料でもあろう。第二回目の調査（平成12年11月30日～12月2日実施）で、同年齢の女性からも子供の頃の思い出を語ってもらっているので、今後、男と女の遊びの習慣等について比較をする作業を通して、一層面白い事実が明らかになるだろう。また、「落ちりんご」と呼ばれる青森県出身の女性が四割という高い割合で村に嫁いでいるくらい海峡を隔てた対岸の地域と関係が深いので、隣接する南茅部、恵山、戸井はもちろんとして、津軽、下北にも類似の習俗や遊びがあったかどうか調査する必要がある。

4　まとめと今後の展望

本稿では椴法華方言の第一回目の報告を行った。まず音声的特徴を記述し、その後談話テキストを仮名によって表記した。その結果椴法華方言に特徴的な音声として中舌母音、無声子音の有声化、入りわたり鼻音、「ひ」と「し」の交替が明らかとなった。今後の目標としてはさらに詳細な分析を行い、分布と対立を明らかにすることがある。また北海道外に目を向け、他方言との対照研究も行う必要がある。

また今回は自然談話のみを記録したが今後は語彙調査も平行して行っていかなければならないと考えている。そのほか世代間の発音、語彙の変化や文レベルのプロソディーに関する調査も重要である。

また本稿では興味深い風習も取り上げることができた。調査協力者の子供時代における遊びや海での用の足し方、遊び仲間内での役割分担など今はもう失われてしまった習慣が生々しく語られている。これらは皆往事の椴法華を知るための貴重な資料となる。これからはさらに様々な事実を掘り起こし記録していかなければならないと考えている。特に時間が余り残されていないことが重大な問題である。高齢化は急速に進んでいる。風習も言葉も若年層とは断絶があり、受け継がれていない。話者がいなくなれば貴重な風習も言葉も一度に失われてしまい元には戻せない。迅速な調査と記録が急務である。

謝辞

本研究に当たり玉村栄吾氏には調査協力者として長時間にわたるインタビューを快諾して下さったのを始めとして限りない協力を賜った。この場をお借りして厚く御礼申し上げる次第である。

また調査協力者の選定、過去の資料の閲覧等に際しては椴法華村教育委員会の方々にお世話になった。ここに厚く御礼申し上げる。

また本研究は平成12年度室蘭工業大学 CRD センタープレ共同研究「道南渡島東岸部方言の緊急調査」の助成を受けている。

注

1)　談話記録を書くにあたって、北海道開拓記念館の丹治輝一氏から貴重なご指摘をいただいた。感謝申し上げたい。丹治氏は、出身が渡島半島の松前町で（昭和２０年生まれ）、高校卒まで当地で過ごされたとのことである。なお、氏は、ご自身の方言の知識と言語的直感で訂正されたと思われるので、必ずしも、指

摘された箇所のすべてが実際の音声データと合致するわけではない。明らかな異同のある場合は、音声データの音の方を優先させた。もちろん、誤り、不適切な点があるとすれば、すべて筆者のみの責任である。

2)「ワラサンド」は丹治氏によると全部「ワラシャンド」に訂正されていたが、玉村氏の発音では、確かに、前者の音であった。方言差が発音の面であるのかもしれない。

3)「モンコ」について、丹治氏は次のような意見を寄せてくれている。「東北地方では『モッコ』は『おそろしいもの』、『おばけ』をさす方言であったらしく、蒙古襲来に結び付ける解釈にはさらに吟味が必要であると思います。北方史の研究者のなかには、文永、弘安の役ではなく、一般にはあまり知られていない『北からの蒙古襲来』(元朝のサハリン侵攻)と結び付ける解釈もあるようです。」「サハリン侵攻」説については、中村(1992)「「北からの蒙古襲来」小論－元朝のサハリン侵攻をめぐって－」史朋２５号 pp1-9 を挙げておられる。お化けを指す「モンコ、モッコ」が先にあって、後に蒙古を取りこんでいったのか、本論で述べたように「蒙古」の意味が一般化してお化けを指すように到ったのかは、丹治氏の意見のように、現段階では結論づけることはできない。なお、北海道新聞２００１年７月２５日『魚眼図』「モッコがくる」で小野寺彰氏(北海道大学教授)は、青森県津軽半島十三湖付近の生まれの祖母が夜になって寝ない悪い子のところには、山からモッコが来るという「怖い話」をしてくれたという幼い頃の思い出を書いている。小野寺氏は「モッコ」は「蒙古」であり、「蒙古襲来の折り、神風で津軽に流れ着いた兵の話が長い間言い伝えられたと想像される。」と解説している。

文献

(1)石垣福雄, 方言収集緊急調査 文字化原稿, 椴法華村 (1978).

(2)石垣福雄, 北海道(昭和 55 年度)各地方言収集調査 文字化原稿, 椴法華村, (1980).

(3)平山輝男, 日本の方言, 講談社, (1968).

(4)城生佰太郎, 音声学, 新装増訂三版, アポロン, (1992³).

Appendix

01 taḳede soïde asuu̯konona taḳekatˀ çi̯tono jeno mae deteno taḳe kapˀparatˀte kɯ̈rɯ̈ndaḳara no

02 dze tsɯ̈i̯kamaeṭara hore sɯ̈ŋɯ̈ɯqaḳarɯ̈besa

03 jo soedemo horejo kao mïba tsïːsana ɯarasando daḳara daba soːindamoⁿde hore hoḳanomon torɯ̈najotˀte

04 sonojoːnï si̯tẹnẹ anoïroïroto japˀparïno sïdoːsi̯tekɯ̈reṭa mondajo

05 ɯ̈mïsa haïrɯ̈tokïdaṭe sonotoːrïjo ne ïtsïnïsan demotˀte no ɯ̈ːmïno kamïsama tatˀtekeretˀte no

06 sosi̯te hore osi̯kˀko sɯ̈rɯ̈nonï ɯ̈mïsa mɯ̈ḳaɯqanede okasa mɯ̈ḳatˀte çomben si̯tamonda

07 ɯ̈ːmïno kamïsama tatˀtekere te

08 mazïse daḳara ïmajɯ̈ː ɯareɯqareno ïmano koṭobade jɯ̈eba sono mono daïdzïnïsɯ̈rɯ̈ no sïzenɯo ïzen sosi̯te daïdzïnïsi̯tekï̯ta sono koṭobamo dandan naḳɯ̈natˀte sïmatˀtaṭe ḳotosa

09 ɯ̈ːmïno kamïsama tatˀtekere te

10 tatˀtekere te ɯ̈mïsa haïtˀtetẹmo ɯareɯqare çombensɯ̈rɯ̈kara osïkˀkosɯ̈rɯ̈kara ne ma ɯareɯqareno koṭobade jɯ̈eba ma jɯ̈rɯ̈si̯tekeretˀte jɯ̈ː ïmï nandabesï no

11 maː sosi̯te naḳeba joḳɯ̈nẹ ano naḳeba jamakara moŋko kɯ̈rɯdotˀte

12 moŋko kɯ̈rɯdotˀte joḳɯ̈ ïɯqareṭa

13 obaḳeno moŋkodamonojara oreda kaïseṭsɯ̈si̯tabaïnï areno are nanṭe jɯ̈tˀtetadaka moːkoga semeṭekï̯teno

14 moŋkoṭo moːkoo ïçˀçonïsï̯teïrɯ̈ si̯teïrɯ̈monojarane

15 moː hotˀtondo moː soːjɯ̈ː koṭobamo naḳɯ̈natˀtasïne

16 ⁿda naḳeba jamakara moːko kɯ̈rɯ̈zotˀte

17 oː dzɯ̈ïibɯ̈n hajaïne

18 joːsɯ̈ ïteba jonïmˀmo kɯ̈reba omeː tagasïno (tamamɯ̈rano?) daïkɯ̈sademo jɯ̈rɯ̈gɯ̈neïbeja

19 gokɯ̈roːsan gokɯ̈roːsan

20 soːda soːda ɯ̈mïsa mɯ̈ḳaɯqanedene

21 mɯḳaɯ̈ṭokï̯ɯqa jɯ̈ːṭoḳïɯqa ano sïgonïnsi̯te ano aïda sïgonïnsi̯te no ɯ̈ːmïno kamïsama tatˀtekere te no

22 soïde mïnˀna kotˀtça mɯ̈ïte konⁿdo ɯ̈mïsa haïrɯnï mïnˀna çombensɯ̈rɯ̈ɯqaḳe jaja kotˀtça mɯ̈ïi̯te

23 soïde ïsˀseïnï haïrɯ̈ haïrɯ

24 no tçakˀkoïṭoḳï çi̯torï çi̯torïtˀte haïnˀneḳatˀtanaː

25 hoʈonˀḍo gaḳïdomo ɸüi̥taɾï sanˀnïnsi̥ʈẹ gonïnkütɾaïsi̥te hotˀtondo ütmïsa haïtˀtamonda
26 çi̥ʈoɾï ütmïtˀteɯane oïʈaʈʂïɯa joːḳe neḳatˀtanaː
27 ütmïsa haïtˀte oɾe ˈimajüː ojoŋütnotˀtena
28 ojoŋütmo nandakedo gaⁿdzedemo nandemo no nïmeːta samˀmeːta ˈiḳeba aɾünda:
29 ⁿde hoɾe mïnaːsi̥te mïnaːsi̥te hoɾe kjoːɾjokütsïatˀte de oḳamaɯaɾite anoː hoɾe maː koːjüeba mane jüenaïkedo ˈimade jüeba hoɾe koɾe nantenda hoɾe anoː kaːsan çokˀkono kono koʈo nantçünda areba çonïmasïda
30 çonïmaçïno si̥ʈoʈatsïɯa hoɾe ojogeneː ɯaḳedabesẹ
31 soːjüːnoɯa oḳamaɯaɾitˀteno
32 anoː oḳanohoː siːtaḳünonï hoɾe siːtaḳünonï no mïseno banano kaŋodatoḳa soːjüːmonoɯo koː motˀteḳi̥te soïde çiːtaḳü sü̥tambaï sürüɯaḳejoː
33 ɯadaïʈaʈʂideɯa ɯarasaⁿdoɯa oḳi̥sa deʈe maː namara nïzüpüm̀mo haïrebaneː koː taɾüsa çi̥totsüː gaⁿdze toɾünda
34 gaⁿdze toɾüɯaḳedabesïː no
35 soïde koⁿdo mazü totˀte motˀte küɾüdeço hoɾe maɾüïsïno ojaⁿdzïʈoḳa çokˀkoʈatsï ojoŋeneːkara oḳamaɯaɾïsi̥të çiːtaïʈe taïʈe matˀteɾüïbesa
36 sïte ɯaḳeɾüïʈoḳïmo korede okˀkïːhoːkara oḳamaɯaɾïmo çi̥totˀtsü ojode oḳi̥sa ˈitˀtẹçi̥ta si̥tonïmo si̥totˀtü daḳara hontˀtoːnï sono ˈïzïmemo nekatˀtasïno sode aïdabesa
37 hontoːnï ma züɾüı ˈˈɯarasaⁿdodaba asüïbatˀta dakara hontonï ˈïːsekaïdatˀta
38 ˈima sïᵐbüïmˀmïrebane
39 ˈïja konoheẽɯa hoʈondo gaⁿdzede neːḳa mïnamïkajabedemo
40 esanˀno hoːdemo hotondo gaⁿdzedajo
41 gaⁿdzedano noːnatˀtendajo no
42 nonatˀtenoɯa are ano gaⁿdzeno ḳoʈo baɸüɴ tçüːtena
43 soïkara nonano kotoɯo oï tçotˀto nonano ḳotoɯo nantçüjüː
44 müɾasakütünï nona sïrasete atˀtandapü̥
45 de oḳamaɯaïmo oḳi̥sa jüḳüïsi̥tomo onadzïsa
46 kjoːndonï ɯaḳeʈeno bjoːdonï okˀkïhoːkara bjoːⁿdonï
47 soïkarajamaṣa ˈitˀte sü̥ŋinoḳi̥sa noboɾünda no sü̥ŋinoḳi̥sa no
48 soïde büïndonono aḳadamaːha oŋatˀtendajo no büïndono aḳadamatˀte antaŋatanï jüïtˀtemo ɯaḳanˀnekˀkedo ütndajaʂʈü ütndajaʈʂü
49 sü̥ŋino tepˀpensa no saːḫore kojüï çi̥taːtçi̥ hoɾe ɯaḳaɾüïbese noboɾeneːbese
50 soïkˀkara dzüɾeː ɯarasaⁿdo hoɾa oʈosi̥te joḳosüïbesa
51 soja tekïraːka koⁿdo si̥taïïiʈe hoɾe sïroïḳatasa de sono ɯaḳeɾüïʈoḳïmo no tsüïrano ˈïːnokara kojaʈe mïnˀna daḳara honˀtoːnï oradano ˈⁿdzïmetejüː koʈobamo sïranaḳatˀtaṣisa
52 madzïṣe de sono si̥totatsï koⁿdo çakaïnï detatokïno soŋkaïgiin si̥taɾï nanse eraḳüïnatˀtemo neː maⁿdzïsa joḳüïitˀtamonda ja tsüïgisandaba dzüɾüï ɯarasandode atˀtakedo ma dzüïⁿbüï oraʈaʈï meⁿdo· mïʈamondaʈe ɯadamo namˀmo sono mendoːmïɾüïtoḳa soïⁿdẹ neːnọsạ
53 sïzendanoseno ɯareɯareno baːïɯa maⁿdzï jüïɯasebasa
54 ⁿda ⁿda ⁿda ɾïḳüïtsüïdabese sü̥ŋino küïitenoɯa no dzatsüïnoḳïjoɾïmo koː taḳaḳüïnatˀtendajo no
55 soː hoɾe üïesa hoɾe tsüïraː (<tsüïrüïɯa?) nobotˀte oçisamano ataɾïŋa ˈïikara hajaḳüï hoɾe ano ütmüï ɯakejanse no
56 soɾeo ˈïʈçïïʈçi hoɾe are si̥temïtë kondo üïekara oʈosü̥ïhoːṣeba si̥taïï ˈïʈe hoɾe no büïⁿdo tonˀnï ˈitˀte hoɾe si̥taïï ˈïʈe hoɾe çiroïḳaʈaha: ɯarasaⁿdo ˈïʈe sojüï çi̥ʈoʈaʈçi tçanto dantaï aɾüïmondanda
57 maːdzï oɾano oboʈeïɾüï haNïdeɯa ano aïda oɾe tçakˀkoï ʈokï̄ joːḳɯ mada oɾano oʈoto ˈimoːtoʈaʈʂimo hoɾa naḳeba jamakara moŋko küɾüïdotˀte
58 maː soɾeka ɯada tçakˀkoïʈoḳïnï ɯmïsa haïɾüïʈoḳï üːmïno kamïsama tatˀtekeɾe te soːjüː aɾeneːna:
59 tatˀtekeɾe te ⁿdaⁿdaⁿda soɾe hoɾe ˈïŋaïjono no oʈonade kanŋaeraɾeneː japˀpaɾï sono soːjüː aɾeŋa aɾüïndabese ne
60 ne maː si̥tsüïreːnï ataɾüïtoka neː no si̥tˀtatˀtara kamïsamazanoe çoᵐben kaḳeɾüïkebaːtˀte no soːjüː sono ma ïmano koʈobade ïeba naːntçüːndaḳane
61 çi̥toɾïçi̥toɾïɯa ɯada üïmïjo japˀpaɾï ano joḳe ütmïsa haïtˀta tamesï neːno
62 taïŋemo ɸüi̥taɾï saãnïɴ gonïn si̥tẹne
63 ma maⁿdzï naːnïjaɾüïnïmo mïnˀnadana
64 ɯaɾüïḳoto sü̥ɾüïnïmo japˀpa mïnˀna saː